



あいちの会 NEWS



第32号

発行責任者／北折健次郎 編集／あいちの会NEWS編集委員会

認定NPO法人 あいち骨髄バンクを支援する会 〒464-0006 名古屋市千種区光ヶ丘1-22-7-105

【電話&FAX】052(712)0457【E-mail】npoaichi@tj9.so-net.ne.jp【HP】http://www.aichinokai.or.jp/

新体制で新たな活動を

理事長 北折健次郎

5月18日開催の理事会で、あいちの会が発足当初から理事長を務めていただいていた森島泰雄先生が退任されたことに伴い、新たに理事長を拝命することになりました。よろしくお願い致します。思い起こせば、昭和63(1988)年8月3日、名古屋大学医学部附属病院近くのマンションの一室で、「名古屋骨髄献血希望者を募る会(募る会)」が発足してから、ずっと骨髄バンクのボランティアとして関わっており、世代交代の必要性を感じながらも、相変わらず続けているのは、ボランティア活動を通じて出会った多くの人に、逆に助けていただいたことに対する感謝と、また活動を通じて出会った患者さんたちの笑顔に救われていたことだと思います。現在、骨髄バンクは若年層の登録が少ないため、年々ドナーの高齢化が進み、現在骨髄バンクに登録されているドナーの年齢別内訳は、40代がピークになっており、このまま高齢化が進むと、55歳の誕生日を迎えて「卒業」されるドナーさんが、どんどん増えてきます。小学校・中学校や高校・大学での授業の一コマをお借りして、白血病で骨髄移植を受けた患者さんと一緒に伺い、命の大切さ、献血や骨髄バンクの大切さなどの「命の授業」をさせていただいたりしていますが、まだまだ若年層に働きかけるいいアイデアが思い浮かびません。是非、皆様からお知恵を拝借出来ればと思います。よろしくお願い致します。

若年層に向けての講演会

4月12日(水)、豊橋保健所にて5月8日開催の献血併行型ドナー登録会に向けて、説明会と講演会が行われました。お話を聞いていただいたのは豊橋准看護専門学校1年生80名と豊橋歯科衛生士専門学校1年生40名の学生さん。

保健所担当課長よりご挨拶、説明用DVDを観ていただきました。その後私より骨髄バンクの現状、問題点などをお話させていただきました。

提供経験のあるボランティアにもご同行いただき、登録した時のお気持ち、提供時のお気持ち、患者さんからのお手紙を受け取った時のお気持ちなどお話いただきました。

この説明会と講演会は毎年開催されています。継続して開催していただけることに「感謝」。来年度も学生さんにお会いできることを楽しみにしています。

説明会を通して、一人でも多くの方がドナー登録していただけることを切に願って会場を後にしました。



「第5回ボラまっち!なごや」に参加 ～愛知学院名城公園キャンパス～

「あなたにマッチしたボランティアを見つけよう!」をテーマに今年も開催、当会もブース出展してきました。「ボラまっち!なごや」は企業展のNPO版。ボランティアを経験したい方とボランティアを募集している団体の出会いの場です。

当会のブースに立ち寄り、活動などを詳しく聞いていただくことが出来ました。また、骨髄バンクについて、登録についても詳しく尋ねる方も多く、休む時間もなく一日を過ごすことができました。活動も知っていただき、骨髄バンクも知っていただき、とても充実した一日を過ごすことができました。



3年目に入った献血ルームの活動

2017年度の献血ルームでのドナー登録推進活動は、少し形態を変えて続けています。4月に新たにオープンした「ゲートタワー26献血ルーム」での活動を第1・3・5土曜日とし、第2日曜日を「大須万松寺献血ルーム」、第4日曜日を「栄献血ルーム」、「タワーズ20献血ルーム」は必要に応じて、という日程です。

新しい献血ルームで活動を始めるのは、やり方をひとつひとつ見極めていく必要があり、なかなか大変ですが、多くの新しい献血者さんにPRできる場でもあるので、楽しみのほうが大きいですね。呼び掛けを続けていると、たくさん「あたたかい声」に巡り合えます。「誰かの役に立ちたいと思いました。」と話してくれた若い女性。「全身麻酔は怖いけど、それで誰かのいのちが助かるのなら。」と、そろって登録してくれたご夫婦。きっとそのお気持ちが患者さんの未来を繋げてくれる。そう感じられるシーンに立ち会えることは、我々にも頑張るチカラをくれます。

多くのボランティアさんの協力のおかげで、4～6月の献血ルームの活動でのドナー登録者は、前年の61名に比べ91名と、1.5倍に増えました。愛知県全体を見ても、3年前までは数年間続けて、新規登録者数より削除数のほうが多いという減少状態でしたが、一昨年997名・昨年1297名の新規登録があり、増加へと転じることができました。それだけ多くの「生きるチャンス」を患者さんに届けられたこと、本当に嬉しく思います。と同時に、まだそのチャンスを得られない患者さんのために、今後も続けていかなければ、と決意を新たにしています。 内藤

